

第4回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【大賞】

「侍」 北海道 近藤 ゆみ子

ススキノ三丁目のビルの三階に『侍』という名のスナックがあった。

和風の店内は、白木格子とガラス製のカウンターが伸び、バーテンダーは着流しに、たすき掛け姿。壁全面のモノクロの巨大なパネル写真が見る者を圧する。三船敏郎演じる椿三十郎が、日本刀を逆手に構え、こちらを睨みつけている。

小学校に上がる前の私の目には、その猛々しい侍の姿が焼きついた。

『侍』のママは、二十六歳の母だ。赤ん坊だった私を抱きかかえて、婚家を飛び出てきた人である。大胆で負けん気が強い。親族から「辛抱が足りない。これからどうするつもり」と咎められ「この子は私がひとりで育て上げる」と言い返した。

ふっくらとした色白で、あまり化粧つか気のない人だった。割烹着の袖口のゴムが食い込んだ腕と、水仕事で赤くなった手。伸ばした爪のマニキュアが、私の目にも、ちぐはぐに見えた。

開店のために作った借金の返済もあり、働き詰めで、寝不足とストレスも相当だったのだろう。うちで茶碗を洗っている時などは、恐い顔でずっとひとりごとを言っていた。私は、気配を消して聞こえないふりをしていた。

六歳の誕生日を迎えると、夜はいつも一人でいた。「よそに預けられるのは、もういやだ。一人で大人しく留守番できるから」と、私が哀願したからだ。火の元には触らないこと、玄関と電話の呼び鈴が鳴っても居ない振りをするように、繰り返し約束させ

られた。電話のベルが二回鳴って一旦切れ、再び鳴った時は別だ。二人で決めた合図の電話が鳴ると、受話器に飛びついた。

怖い夜もあった。マンションの部屋のブレーカーが、突然落ちた時だった。暗闇に怯えながら、ダイヤルを回す。店の番号は暗記していても、手探りなので何度も失敗してから、やっと繋がった。「いますぐ帰ってきて」と泣いて縋ったが、その晩は電話機を抱えたまま、玄関で寝てしまった。

その後、働き過ぎで体を壊した母は、水商売を辞めた。今度は飛び込みの訪問販売で、私を養ってくれた。怒りっぽくて、絶対的な母への反発もあり、私の夢は、子供ができたら両親掃っていてあげることだった。

結婚した私に、娘がさすが授かった。孫の姿に、私が重なったのだろう。ある日、母が言った。「昔はがむしゃらに仕事ばかりしていたけれど、もっと一緒にいてあげれば良かった。」

小さい時から一人で寂しい思いばかりさせて、あんたには大きな借りを作ってしまったね」

いつもの気丈さは無かった。長年の間、私に伝えたかったのかもしれない。初めて聞いた、詫び言だった。母こそ女を捨てて再婚もせず、子育てという戦を終えたのだ。

「独りで育て上げる」と言った母に、二言はなかった。ふと『侍』の椿三十郎が、瞼に浮かんだ。

今年、母は八十歳。私が仕事から戻ると、童女のように、その日の出来事をしゃべり出す。